Security Show 2008レポート(上)

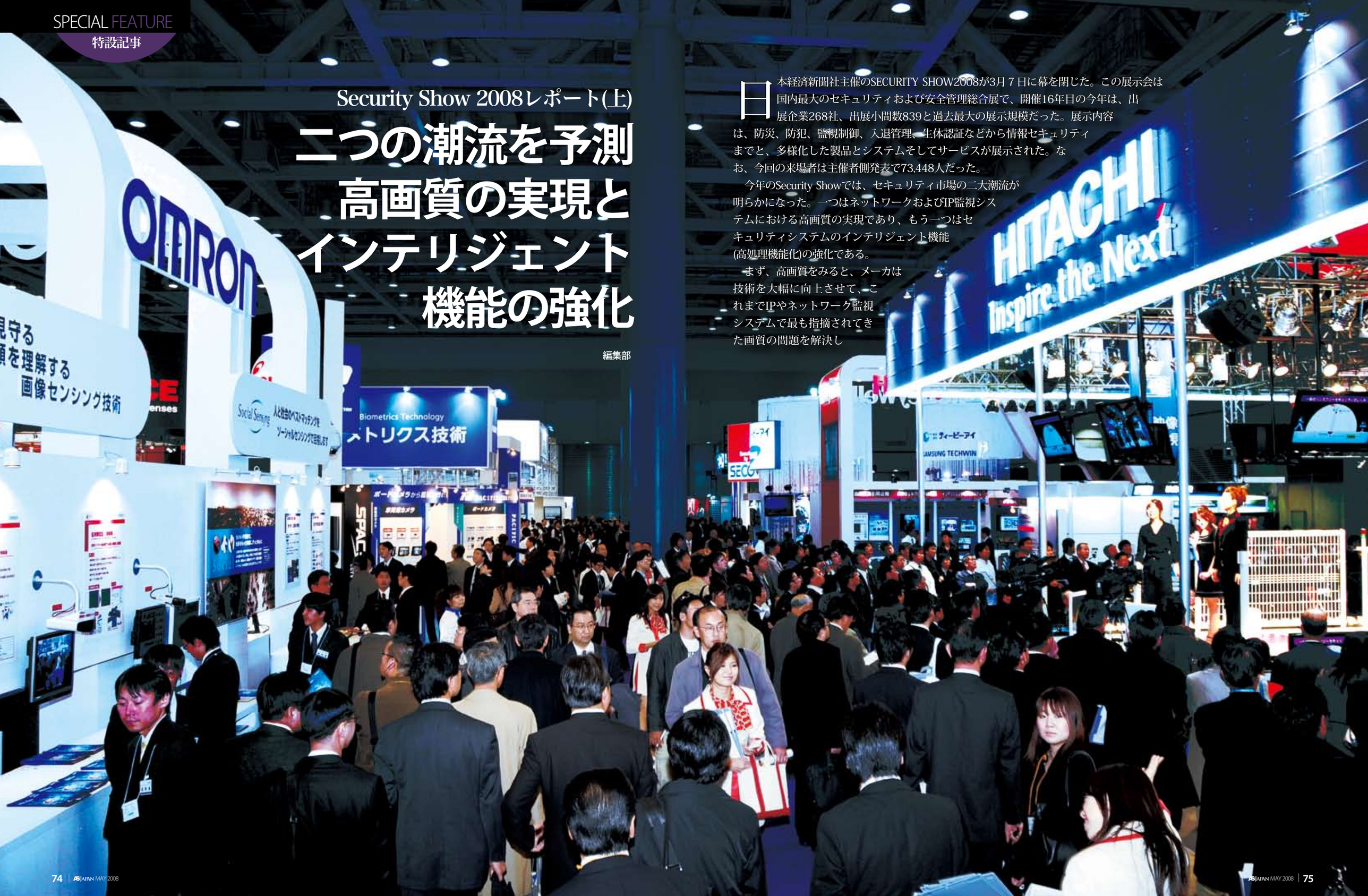
二つの潮流を予測 高画質の実現とインテリジェント機能の強化

編集部

日本経済新聞社主催のSECURITY SHOW2008が3月7日に幕を閉じた。この展示会は国内最大のセキュリティおよび安全管理総合展で、開催16年目の今年は、出展企業268社、出展小間数839と過去最大の展示規模だった。展示内容は、防災、防犯、監視制御、入退管理、生体認証などから情報セキュリティまでと、多様化した製品とシステムそしてサービスが展示された。なお、今回の来場者は主催者側発表で73,448人だった。

今年のSecurity Showでは、セキュリティ市場の二大潮流が明らかになった。一つはネットワークおよびIP監視システムにおける高画質の実現であり、もう一つはセキュリティシステムのインテリジェント機能(高処理機能化)の強化である。

まず、高画質をみると、メーカは技術を大幅に向上させて、これまでIPやネットワーク監視システムで最も指摘されてきた画質の問題を解決し



A&S JAPAN、Security Show 2008にて3400冊を配布し切る

当社はSecurity Show2008において第３号（３月号）の特別追加印刷分2700冊、創刊号、第２号そして他のA&Sグループ発行誌700冊の計3400冊を無料配布した。特に３月号は、監視制御ソフト、インテリジェントビルおよび多種多様な製品紹介があったため、出展社スタッフの方々および来場者が積極的に見本誌を手に取り、多くの来場者が無料購読を申し込んだ。展示会の２日目には本誌３月号がほとんど配布し切ってしまい、本誌の提供する国内および海外の専門情報に対するセキュリティ産業界での需要の強さを改めて知ることができた。最終的には４日間で1200名の新規購読の申込を受けつけた。なお、本誌編集部はSecurity Show2008の海外からの出展各社を取材し、日本市場での現状や製品情報そして技術情報を取材した。詳細記事は本号および７月号に連載する。

た。会場で展示されていた多くのIP監視カメラ、DVR、NVRはすでにアナログCCTVシステムと変わらない結果を示していた。例えば、パナソニックでは、第２世代i-Proメガピクセル IPカメラ、高感度と高画質とを同時に実現した同社独自技術スーパーダイナミックⅢカメラシリーズなどである。また、カメラやDVRに留まらず、レンズベンダの展示にも注目すべきものがあった。タムロンやフジノンは、IP監視システムの画質表示向上に大きく貢献する、メガピクセルカメラ対応メガピクセル・バリフォーカル・レンズを展示していた。

インテリジェントシステムを見ると、様々なセンサや生体認証またデータ検索などの技術を連結して最新セキュリティシステムを構築することで、操作側の負担を軽減するとともに効率的な監視業務を実現していた。例えば、三菱電機のパソコン再生・通信ソフトウェアDX-PC55PROでは、従来から可能だった遠隔制御や再生および検索機能に加え、新開発の「顔サムネイル検索機能」と「行動パターン検索機能」を装備していた。NECでは、リアルタイム映像解析とRFIDタグとの連動によるリアルタイムの情報化をテーマとしていた。具体的には、映像解析による出来事発生の自動検出し、RFIDタグによる関係者や部外者を分離した状況認識を提供することで、正確な状況把握と迅速な対応を支援するものである。富士通では、侵入者検知や自動追尾機能を搭載の「侵入監視システム」と生体認証システムと組み合わせた「統合セキュリティシステム」を展示していた。

インテリジェント化においてソフトウェアがハードウェアに大きな影響を及ぼすことは、セキュリティ市場においても徐々ではあるが浸透し始めている。それを反映して、今回は注目を集めていたソフトウェア製品が数多くあった。Genetec社のソフトウェアは入退管理とビデオ監視および自動車ナンバープレート認識という３つのセキュリティ要求に対応していた。三井物産エアロスペースでは、不審者・不審車両探知追尾装置「ioiプロダクツ」というソフトウエアソリューションを展示していた。これらの製品は，最近では工場などの民間施設においても赤外線センサに代わる新しい警備システムとして導入が進められている。

ユーザー側からみると、オフィス、家庭、学校、小売業の４つの分野がセキュリティ製品の主要ユーザーである。従って、多くのベンダは４つのそれぞれの分野に対応した統合ソリューションを出展していた。今回の展示会で、セキュリティシステムとオフィスや小売業の業務システムとを統合したソリューションが非常に目についた。特に個人情報保護法および日本版SOX法準拠のソリューションが主要の訴求内容であった。この要望はセキュリティベンダだけのビジネス機会ではなく、異業種からのエプソン、イトーキ、清水建設、東京ガスなどがこの機を捉えてセキュリティ市場に参入した。異業種参入組は、自らが既に保有するソリューションと統合し、ユーザーに高付加価値の選択肢を提供していた。

当誌では、今回のSecurity Showで特に海外ベンダと異業種ベンダに注目して、それぞれの企業が日本のセキュリティ市場をどう捉えているかをテーマとして取材した。掲載は本号と次号の二回連続で、本号では海外ソフトウェアベンダと異業種ベンダ、次号７月号では海外ハードウェアベンダについて報告する。この連載で、読者各位が別の角度から国内市場を見直すことを期待している。 A&S